

# 先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

「合格する可能性が  
高いのは、この大学だよ」  
何気なく答えた事実が  
生徒の進路を大きく変えた

公立・T高校  
Y先生

進学校での勤務が長く、データに基づいた納得感のある進路指導を追求してきた。管理職となった現在は、キャリアの多様な教師が連携し、組織として指導力を向上させることができる学校づくりに注力している。



「東 大と京大、どちらが合格しやすいですか」。センター試験の自己採点が終わった日、女子生徒のAさんが、彼女の担任ではなかった私に声をかけてきました。その時の3年生には、東京大学を志望する生徒がAさんを始め数人いました。Aさんのセンター試験の結果と、両大学の個別学力検査で課される科目・配点などを確認した私は、「今のAさんが合格する可能性が高いのは、京都大学だよ」と、理由とともに説明しました。それを聞いたAさんは、納得した表情をしていました。

数日後、職員室でAさんの担任が、小声で私に話しかけてきました。「Aさんが今日の三者面談で、東京大学に気持ちが向かないと言いつつ出したんだ」。丁寧な面談を通じて、生徒一人ひとりに自信や高い志望を持たせていたその担任は、私にとっては、互いのクラスの生徒の小さな成長も喜び合える、よき同僚でした。彼の言葉を聞いた時、嫌な予感がしました。そして、その予感は当たってしまいました。「『京都大学の方が確実だ』って、Y先生からアドバイスされたと言っていたんだけど……」。

質問されたことに答えただけのつもりが、Aさんに想像以上に大きな影響を与えてしまった。自分の言葉の重みに気づかなかったことを、私は後悔しました。データに基づいた事実を伝えた後、Aさんに「担任の先生としっかり話してね」と言っておけば、担任に「Aさんにこんな話をしました」と伝えておけば、Aさんの将来の夢や学力を熟知する担任は、それまでの面談の内容などを踏まえて、Aさんが心から納得する出願に導いたはずでした。Aさんからの質問に答えを差し出すことだけしかしなかった自分の安易な言動に戸惑うばかりで、私は言葉が出ませんでした。Aさんが京都大学に合格した後、私は改めて担任に謝罪しました。担任は、「無事に合格したのだから……」と言ってくれましたが、私の心は一向に晴れませんでした。

数年後、異動先の学校の職員室で、ある若手の教師が、部活動でかかわりのある3年生に「この大学の方が合格しやすい」と説明する姿を目にしました。話が終わり、生徒が職員室を後にしたことを確認した私は、「担任のいないところで話を進めては駄目だ」と注意しました。普段と違う私の口調に驚く若手に、私は過去の失敗を打ち明けました。そして、「生徒と何を話したのか、担任に共有してください」と頼みました。

20年以上も前ですが、今でもあの失敗を思い出すと、Aさんにも担任にも申し訳なく、私は胸が苦しくなります。

「教師の言葉が生徒にどれだけの影響を与えるのかが分かっていなかった」と、自分の失敗を振り返ったY先生が、今の自分ならどうするかを語ったウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article28816/>